

メールは utsunomiya@yomiuri.com へ

採石場跡 広がる地底湖

大谷石 ルネサンス

宇都宮市名産の「大谷石」と、その生産地の魅力と可能性を見出す動きが活発化してきた。採石場跡地を観光資源や別の産業に活用する動きが広がる。石材としての販路の拡大も探られ、アートとの相性の良さで脚光も浴びる。採石業者の出荷量が減り続け、東日本大震災や度重なる陥没事故でとかく「負」のイメージがつきまとった大谷石。斜陽の時代を抜け出し、「ルネサンス」を迎えることができるのだろうか。

ボートで冒険 観光新ルート

切り立った巨岩と木々に、ヘルメットについたライトを頼りに、一同ぞろぞろとスを降りた。ほの暗い採石場跡地の入り口へと進む。異業種の民間4社が今年

5月に試験的に始めた「地底湖クルージング」。採石場跡地を観光に活用する試みで、現在は宇都宮市の助

成を受ける。同行した今夏、地上はうだるような暑さなのに、坑道を下ると肌寒いほど。吐く息が白くなった瞬間、目の前に地下水の「湖」が現れた。不思議な静けさだった。



来春からのツアーの本格開始に向け、会議を重ねる堀田代表（左奥）ら

たすんだ。

JR宇都宮駅から北西に約8キロの郊外に、東西4キロ、南北4キロにわたって広がる宇都宮市大谷地区。NPO法人「大谷石研究会」によると、江戸時代に凝灰岩の一種の採掘が本格化し、やがて「大谷石」と呼ばれるようになった。採石場は、現在でこそ8か所のみが残るが、跡地や廃坑を含めると250か所にも及ぶ。露天掘りはごく一部で、大部分は地下採掘だ。

クルージングの仕掛け人で、ピルス社の堀田大成代表(37)は「我々の目標は地域資源の掘り起こし。一時的な利益を追うのではなく、息の長い取り組みにしたい」と力を込める。「こんなに神秘的な空間があるなんて」「外国の世界遺産のようだ」。ツアー参加者からは好評だ。

地域資源を掘り起こす

大谷石の給つづけを体験し、「里山ランチ」に舌鼓を打つ。栄養士でもある石原さんは、大谷の新米や上河内特産のユズ、新しい「曲がりネギ」など、大谷の近隣エリアでとれる旬の食材がいっぱいのランチを仕立てた。石の文化に加え、農業文化も息づいているとPRする狙いがある。

大谷石の歴史を紹介する「大谷資料館」は、別の採石場跡地を利用して1979年に開館した。地下約30メートルの採石場跡地も公開され、近年はコンサート会場や映画の撮影にも活用。2010年には約10万人が訪れた観光スポットだ。



地底湖クルージングは、天井ぎりぎりの航行がスリル満点(今年8月、大谷採石場跡地で)＝江原桂都撮影



地上の跡地では、古代遺跡のような場所も

食材PR、石材加工体験

地上でも、大谷地区へ観光客を呼び込む動きは活発化している。石材の産地としての魅力と地元食材を使ったグルメを組み合わせた新たな観光ツアーが、この冬から地元の民間業者らの手で始まる。国内旅行情報の全国誌「じゃらん」で、紹介されることも決まった。

「ギョーザ以外にも宇都宮には観光資源があることを、全国の人に知ってもらいたい」。新たなツアーを仕掛けるのは、農産物販売や観光振興を手掛けるファーマーズフォレスト社の石原綾子さん(33)。石材加工の体験施設「大谷石体験館」の協力も得て、10月中旬ま

大谷石の給つづけを体験し、「里山ランチ」に舌鼓を打つ。栄養士でもある石原さんは、大谷の新米や上河内特産のユズ、新しい「曲がりネギ」など、大谷の近隣エリアでとれる旬の食材がいっぱいのランチを仕立てた。石の文化に加え、農業文化も息づいているとPRする狙いがある。

大谷石の給つづけを体験し、「里山ランチ」に舌鼓を打つ。栄養士でもある石原さんは、大谷の新米や上河内特産のユズ、新しい「曲がりネギ」など、大谷の近隣エリアでとれる旬の食材がいっぱいのランチを仕立てた。石の文化に加え、農業文化も息づいているとPRする狙いがある。

大谷石の給つづけを体験し、「里山ランチ」に舌鼓を打つ。栄養士でもある石原さんは、大谷の新米や上河内特産のユズ、新しい「曲がりネギ」など、大谷の近隣エリアでとれる旬の食材がいっぱいのランチを仕立てた。石の文化に加え、農業文化も息づいているとPRする狙いがある。



27 白鷺足利 関東高校野球V

27 25 29 小中作文コンクール

27 「まにま」演表 県内でも

27 石橋病院 中学跡地へ

宗教用典の総合社 仏壇の浄邦堂

1/2 スタート 大谷石ルネサンス 6回連載 (連日ではないです)

大谷産菜 飯村